難しくて幸せな出来事

自分の気持ちが語り手にそっと重なる

藤岡陽子

國森 康弘 写真・文
いのちつぐ みとりびと 全4巻

その人らしい最期を迎える。それが人として一番幸せなことだとはわかっているけれど、とても難しいことだと思う。でもその難しくて幸せな出来事を、『いのちつぐ「みとりびと」』は見せてくれた。

滋賀県の東近江市などを舞台にしたこの写真集は、全部で四巻から成る。天寿を全うした人たちの「旅立ち」が、写真と短い文章で綴られていく。それぞれの巻によって語り手が代わり、写真を目にしながら文章を読んでいくうちに、自分の気持ちがその語り手にそっと重なっていく。

一巻の語り手は曾おばあさんを看取る小学五年生の女の子、恋ちゃん。二巻は旅立つその人である八十九歳のナミばあちゃん。三巻では地域医療を担うドクター花戸。四巻は身内を看取った九組の家族それぞれである。看取る気持ち、看取られる気持ち……。限られた時間の中での心のやりとりが、ページの一枚一枚に満れ、詰まっている。

一巻に登場する五年生の恋ちゃんは、大好きなおおばあちゃんを看取る。息がとまりそうなおおばあちゃんに「行ってきます」と声をかけ学校にいく恋ちゃん。朝起きると、おおばあちゃんが亡くなったことを教えられる恋ちゃん。白い布で顔を覆われたおおばあちゃんの側らにひとり寄り添い、手に触れ、足に触れる。幼い頃から一緒に暮らし、無条件に自分を愛してくれたおおばあちゃんの冷たい頬に触れる。ゆったりとした時間が二人の間に流れる……。

二巻のナミばあちゃんは「君ヶ畑で最期まで過ごしたい」という思いを胸に、元気な時は一人暮らしをし、身体が弱ってからは周りの人たちに助けられながら自宅で過ごす。家族や近所の人たちはさぞかし心配したことだと思う。それでも、ナミばあちゃんの望みは大切にされて、家で息を引き取ることが叶う。ナミばあちゃんが最期に流した「ありがとう」の涙の一筋が胸を衝く。

看護師でもある私は、地域医療に携わる永源寺診療所の花戸貴司医師の日々が描かれる三巻も好きだ。「死はこわいものでも、敗北でもないことを知りました」と花戸医師は言い、最期まで住み慣れた家で暮らしたいという人の心と身体を、優しい瞳でじっと見つめている。白衣ではなく普段着で、必要とされればどこへでも駆けつけて行く。患者の自宅はもちろん老人ホームや小学校、時には患者さんが日向ぼっこしている路上もあり。使命感を持って働く姿が、医師としてはもちろん、迷いのない大人の生き方として恰好いいと思う。四巻では、家族にはそれぞれの歴史があり、家族のだれかを看取る時には、涙と悲しみの笑顔の中で、みんなが繋がっていくのだということを信じさせてくれた。

こうした穏やかな「看取り」までの過程には、家族をはじめとするたくさんの人たちの支えがある。地域医療に全力を傾ける医師の決意がある。そして何より、大好きなわが家で逝きたいという本人の強い意志がある。そうした想いを、著者は写真に込めて伝えてくる。悲しい本ではない。切ない本でもない。説教くさい本でももちろんない。ただ温かい本だと思う。

著者のあとがきに「関東のある小学校では、『人は死んだら生き返りますか』という質問に4割のこどもが『はい』『生き返ることもある』と答えました」とある。こうした子供たちの回答は残念だけれど、約八割の人が病院で亡くなるという今の日本の現状を映し出しているともいえる。けれど、看取りを経験した子供は決してそんな答えは出さないだろう。

小学四年生のうちの娘が、この本を真剣に読んでいた。何を思ったかは訊いてないけれど、彼女もおばあちゃんを看取った経験がある。自分をいつも撫でてくれたおばあちゃんの手を、温かいタオルで一生懸命拭いてあげた最後の別れがある。そのことを思い出していたのかもしれない。

（ふじおか・ようこ氏＝作家）

★くにもり・やすひろ氏は写真家・ジャーナリスト。二〇一一年度上野彦馬賞、コニカミノルタ・フォトプレミオ2010など受賞。著書に「家族を看取る」「証言沖縄戦の日本兵」がある。一九七四（昭和49）年生。

撮影：國森康弘　第4巻「いのちのバトンを受けとって」より

『いのちつぐ「みとりびと」』（全4巻）
①恋ちゃんはじめての看取り
②月になったナミばあちゃん
③白衣をぬいだドクター花戸
④いのちのバトンを受けとって
（AB判・各三二頁・各一八九〇円（全4巻揃い定価七五六〇円）、農山漁村文化協会）